

合唱団 Rinte は、一九九六年の確か：2月に立ち上がった。設立当初よりアカペラの演奏を基本として、ルネサンス期から現代の作品を歌ってきた。

合 合唱団 Rinte は昨年創立 20 周年を迎え、6月に京都府立けいはんなホールにおいて、精華町 少年少女合唱団のみなさんと「ゆずり葉の木の下で～大人と子どもとつむぐうた～」と題した記念演奏会をおこなった。子どもたちと唱歌や童謡を歌い合ったり、未来を歌い合ったりして、絆を確かめ合った。会場におこしいただいたみなさんや共演した精華町 少年少女合唱団のみなさん、保護者のみなさんから私たちも多くの力をいただき、多くの方と音楽を通じて共感できる幸せを感じた。

そして、今年は第 10 回演奏会。Rinte はこれまで歌ってきた歌を数曲歌うステージとジョン・ラター (John Rutter) のレクイエム (Requiem) を選んだ。



ジョン・ラターは、1945年ロンドン生まれのイギリスの現代作曲家。ロンドンの私立学校での合唱経験を

経て、ケンブリッジ大学のクリア・カレッジで音楽を学び、その後、大学での音楽指導と主に合唱曲の編曲・作曲に力を入れてきた。1979年より、作曲活動に専念するため独立し、1981年に教え子を中心としたプロの合唱団ケンブリッジ・シンガーズを結成、1984年には専用レーベルのコレギウム・レコードを設立、自作を含めた合唱曲を多数録音している。

レクイエム ～カトリック教会の死者のためのミサ曲

イギリス人の作曲家による「レクイエム」は数少ないが、そのなかでも広く知られているのはベンジャミン・ブリテンの「戦争レクイエム」。ラターのレクイエムはブリテンとは対照的に小規模だが、同様に英語のテキストも取り込まれている。

第10回演奏会

Rinteは何を歌ってきたのか、何を歌っていくのか

ラターの場合、英語の部分はイギリス国教会の葬儀によく使われている詩篇、他に祈祷書の中で使われる文になっている。このレクイエムは、1985年に彼の亡くなった父親に捧げるため作曲したものだ。

このレクイエムから一番連想されるのはフォーレのレクイエムだ。ラターは前年(1984年)にフォーレのレクイエムの第2稿の校訂版を発表している。それまでよく演奏されていた第3稿と比べ、第2稿はオーケストラも小規模で、フォーレの意図とするレクイエムにより近いと考えられている。

二つのレクイエムの共通点がいくつかある。フォーレは、1845年生まれで、ちょうどラターより100年前の人物。やはり40歳くらいの時父親を亡くし、その後で自発的にレクイエムの作曲をおこなった。フォーレは「楽しみで作曲した」と後に語っている。そして両曲とも Dies irae (怒りの日) を省き、ヴェルディのような劇的な雰囲気より、希望に満ちた明るい印象を与えている。そして、二人とも Pie Jesu をソプラノとして加え、更に両曲とも10年ほど前に作曲した曲が含まれている。フォーレの場合、Libera me は 1877年の作品で、ラターの The Lord is my Shepherd (詩篇 23) は 1976年に個別に作曲されたものである。

この2～3年、ラターの作品をあまり意図的ではないのだが、折に触れて取り上げてきた。世界中で歌われているアンセム(イギリス国教会の典礼で歌われる英語による歌) や昨年精華町の子どもたちと歌った「永遠の花」や「ルック・アット・ザ・ワールド」・・・。レクイエムの終曲である Lux aeterna では、マーラーの交響曲第5番4楽章を思わせる回想的な表情の音楽が私たちの心を虜にする。これまで歌ってきたラターの曲だけでなく、すべての曲への慈しみを込めながら、私たちの未来をも歌いたい。



中 田喜直といえば、「めだかの学校」や「小さい秋みつけた」などで有名な20世紀日本を代表する作曲家。特に、童謡や歌曲の分野で大きな足跡を残した。今回演奏する「夏の思い出」や「雪の降る街を」などもよく知られた歌謡で、芸術歌曲と大衆歌謡が共存した代表的な例と言える。また、中田は「日本の歌曲王」とも言われる存在で、芸術歌曲の代表作である「さくら横ちょう」と「霧と話した」も取り上げた。

大衆歌謡や童謡的要素の強い「小さい秋みつけた」「雪の降る街を」「夏の思い出」は増田順平による編曲、芸術歌曲の「さくら横丁」と「霧と話した」は猪間道明による編曲を選び、その色合いの違いを際立たせた。

Missa Simplex II はリハルト・デュブラによる無伴奏混声合唱のためのミサ曲。

ラトビアの作曲家デュブラは「純粋な音楽、というのは感情の一滴の滴りも許さず多用な技巧を凝らすものではありません。私は最近の作曲家と自分との間にそんな違いがあると思うのです。」と自らの音楽を語る。

私たち日本人は、短調の調べを、「悲しみ」ととらえる向きがあるが、この曲によれば、短調の調べはむしろ「切なく」て「美しい」ほどだ。



10 回の演奏会も多彩な内容となったが、これからも美しく、心に響く作品を歌っていきたい。